

首野綾子著

『海拔0米』

集英社（一九七二）

初版が一九七一年となっているから、今から三十三年前の古い本である。『海拔0米』は、その題名からは内容が想像できないのだが、主人公は新任教師、峠百合子である。場面は彼女が勤務する私立女子高等学校で、そこを中心として様々な人間や出来事に出会って行く彼女の数年が描かれている。私が最初に読んだのも十五年以上も前だったので、この原稿を書くにあたりもう一度読んでみた。確かに文化的な背景は古いし、今では使えない差別的な言葉も出てくる。おまけに作者は女性だというのに女性蔑視の内容も多い。時代を考えると仕方ないかもしれない。それでもこの本を「私の薦める一冊の本」に選んだのは次の二つの理由があったからである。

私が最初にこの本を読んだときは会社員として働いていて学校とは無縁の毎日を送っていた。だから、物語の中で次から次へと出てくる学校での出来事や、事件・事故は作者が話を面白くするために盛りだくさんに創っているだけだと思っていた。実際の学校でそんなに日常茶飯事に問題が起きるはずがないと。読後はたいした感想も持たず、そのまま本棚にしまっておいた。いろいろあって十年後、高等専門学校（高校と短大を合わせた学年の学生がいる）の教師になった。自分には良い再就職先だったが予想をはるかに超える多忙な毎日へとへとになってしまった。そんなときふと昔読んだ本の中の教師のことを思い出した。あれ、あの主人公の新米先生と担任の生徒が出会うとんでもない出来事とあまり

かわらないんじゃない。授業での成功や失敗、あわただしい試験準備や成績の悩み、保護者面談、生徒が家出して夜遅くまで探したと、喧嘩と怪我、異性問題、盗難・万引き、保護者の経済的な問題、合宿やクラブ引率の苦勞、服装取締り・特に女生徒のおしゃれ取締りと反発、就職・進学のお悩み、教師同士で協力したことや様々な謎い恋愛・結婚問題、生徒の自殺、同僚の死まで。私の勤務先は優秀な学生が集まる学校であったが、それでも三年半の勤務の間に生徒の自殺以外は全て出会った。その他に現代に特有のいじめや不登校、セクハラ、バイク事故などもあった。学校というものが本当にこの物語に描かれている通り、人間社会の縮図であることを身にしみて感じた毎日だった。

二つ目の理由は、甚だ私事で申し訳ないのであるが、この本にまつわる私の思い出である。実はこの本は自分で買ったものではなく、祖母が私にくれた最初で最後の本である。みっちゃん（私）は教師になるだろうから、といって手渡してくれた。当時、民間の会社で働いていて教職のことなど考えてもみなかったから変なことを言うなあと思ってもらった。祖母も亡くなった後、やっぱり教師になった。多分、教師になったらという意味だったのだろうが、今日の私を祖母が予言していたと考える方が楽しいのでそう思うことにしている。

板東美智子（教育学部助教授）



坂本龍一＋河邑厚徳編著

『エンデの警鐘「地域通貨の希望と銀行の未来」』

NHK出版（二〇〇二年）

一九九九年に放送され、本にもなったテレビ番組『エンデの遺言』は、『モモ』や『はてしない物語』の作家エンデの晩年のインタビューテープを糸口に、人々を無限の「成長」と地球環境の破壊へと駆り立てる「マネーの暴力」に対抗する様々な思想と、自分たちで新たな「お金」を生み出し、コミュニティの再生や地域の活性化をめざす地域通貨の試みとを紹介し、大きな反響を呼んだ。そして日本の各地で地域通貨を続々と誕生させる呼び水ともなった。

本書は、その続編として制作された二本の番組に基づいており、前半部分は遺言。以後の日本と世界の地域通貨の現状の報告である。日本各地の実践からは、地域通貨の草創期を支える人々の熱い思いが伝わってくる。世界の先進例は『遺言』の時点からの後退や停滞の事例をも含みつつ、地域通貨が問いかける問題の奥深さや根源性を教えてくれる。

しかし、類書にはない本書の魅力は、スウェーデンなどの無利子銀行、ドイツのエコバンク、アメリカのコミュニティバンクなどを紹介する後半部分にこそある。こうしたオルタナティブな銀行の実践は、地域通貨の事例に劣らぬ驚きを与えてくれる。ここに希望や可能性を感じ

る者も多いに違いない。

ところが本書の著者たちは、地域通貨とこうした新たな銀行の試みとの内的なつながりを見つけて出していないようだ。「お金と銀行」のこれからを問うことと題されたエピソードの対談にも、奇妙にも銀行の話はほとんど登場しない。

おそらく、「利子」と「信用創造」を伴う銀行システムに諸悪の根源を見る『遺言』以来の理解が、地域通貨と銀行のつながりを見えなくしているのであろう。例えばこんな風に考えてみよう。この超低金利の時代に誰が銀行預金に利子による自己増殖を期待しているだろうか。銀行が信用貨幣を創造しなければ高利貸しが跋扈するだけではないのか。あるいは、地域通貨こそ、コミュニティのメンバー相互の信頼に基づく「信用貨幣」の創造そのものではないのかと。

本書が示唆する、コミュニティの再生や地域の活性化の核としての銀行という鉱脈は、それを掘り出すという最もスリリングな仕事を読者に委ねられている。そしてそのための手掛かりもまた、本書の随所に散りばめられているのである。

田中英明（経済学部助教授）

